

三分半の暇つぶし（お試し版）

スケルトン☆ぷろていん

気になるあの子も不思議ちゃん？

この頃、僕は立派な馬鹿野郎だった癖にインテリぶっていて何かと鼻につくヤツだった。

これは小学2年生の頃だったと思う。 当時、何かとすぐ喧嘩をふっかけていた僕は何を勘違いしていたのか、喧嘩が強く・男らしく・顔立ちも良い。 いわゆるイケメンだと自分自身で勝手に思っている勘違いちゃん。 今で言う“痛い子”今思えば、Nさんはなぜ僕とお付き合いして下さったかよくわからない。 おそらく彼女に聞いても「え？ なんでかわからない」と彼女自身も摩訶不思議な返答をするに違いない。 その摩訶不思議な彼女は決して顔立ちが悪い方ではない。 むしろ美形と言っても良いぐらいだ。 “綺麗な薔薇には棘がある”とはまさにこのこと。 自分自身が今思えば変わっている子だったので、“類は友を呼ぶ”この言葉が相応しい、そんな感じの間柄。

ある清々しい初夏の朝。 朝早くに支度をし向かうは気になるあの子の家。 そう！ Nさん宅だ！ 出来る限り元気よく、イケメンっぷりを見せつけるために格好は“半袖・短パン”おっと間違えた。 半袖ではなくデロンデロンに伸びきったランニングシャツだった。 勿論、乳首なんてのは白いランニングシャツからガン見え。 数少ない友人やクラスメイトによく、「おい、乳首透けてんぞ！！」とからかわれたものだが、知識人である僕は必ずこう言って返した。

「あれ？ 知らないの？ 擬態って言うんだよ。 擬態」この大馬鹿野郎は何を思ったか“擬態”という言葉に不思議な魅力を感じ、しつたかぶってクラスメイトに話して聞かせていた。 僕を襲う人は余程のバカか何処かの研究所のエージェント位なもんだと思う。（あまりにも不思議な行動をするため脳を調べようとかなんとか）だが、確かに僕は何かから身を守るために擬態していたのだ。 この消したいけど消せない忌々しい過去は、確かに存在している。 未だに友人に会うと、「そういえば……」といった話になる。 まさに今こそ擬態すべきじゃなからうか？ どうだろう？

少し話が脱線した。 僕の過去は修正出来なくとも、この本はまだ修正出来るのだから修正しなくては。 何処まで話したかな...そうそう！ 彼女の家に行ったのだった。 デロンデロンのシャツ・短パンは当時コロコロ○○ックやボンボ○という名称の漫画で主人公がよく身につけていたのだ。 つまり、大馬鹿野郎の脳内ではイケメン＝デロンデロンを身につける。 というまた変な図式が成り立ってしまった。 そんなバッチリの衣装を身につけ、いざ彼女の家のインターフォンを押す。 緊張の一瞬である。

バカは、バカなりに緊張するのだ。 もしかして、今日大地震が起こって彼女を救うヒーローになってしまうかもしれない。 そうしたら俺は、日本の大統領になってしまう。 サインの練習をしなくては。 とまあこんな具合に。 そうこうしているうちに僕の素敵な彼女ちゃんが出てくる。 まるで舞踏会にお誘いする様に紳士らしく片手を取り深く礼をしキスをすると、一言。

「おはよう！」

決まった。 そう.....ここ！ ここが、今日という時間の中で一番僕が輝く瞬間。

対する彼女は、にこりと微笑みながら一言返す。

「オマンコボンゴ！」

さっきまでキスをしていたその白くか細い手は、彼女自身の陰部をべしべし叩き左手は遙か上空を目指して天高く掲げられ整った顔は白目を剥きムクの叫びのように顔が変形していた。 当時、Jリーグが好きだった方はご存知かもしれないが三浦知良選手の“カズダンス”にそれはよく似ていたと記憶している。 三浦知良選手とは違い格好良さの欠片もなく今思えばなぜ僕は彼女と付き合うことになったのだろうと頭を悩ませるばかりである。

気になるあの子を知識（？）で落とせ！

ぐだぐだと書き続けても仕方がないし、ここらへんで僕の謎知識を披露したいと思う。当時、小学校にあった頭の良さそうな人が読んでいるイメージのある本は『シートン動物記』『ファール昆虫記』

その二つの中で『ファール昆虫記』をセレクトした。この時点で、歴史に残る著名な人物に対して唾を吐きかける真似をしている事は前回の駄文を読んだ方々ならご理解戴けると思う。そこに載っていた『不思議なスカラベ』にいたくご熱心になった僕は、ついに中途半端に得た知識で彼女を口説く事にしたのである。

なぜかと言うと.....彼女が僕にこう言ったのだ。

「頭の良い人が好き」

おあいご用だ。 なんとって僕は“歩くファール昆虫記”なのだから。

当時、彼女に向かって言った自分を殴ってやりたい。なぜ僕は「俺？ 俺の事は歩くファール昆虫記と呼んでくれ」と、髪をかき上げながら言い放ったのか。

——そう、僕は顔も知らない。ましてや生きているはずもない人物をまるで親友の様に扱い、全く間違った知識を彼女に披露した。

「知ってる？ スカラベって」

「なにそれ？」

「ふふ、語源は英語なんだけどカブトムシの雌の事さ！」（語源は英語ですらない。それ以前に、カブトムシの雌でもない。）

恐らく、僕はこんな風に彼女が返してくる事を期待していたのだろう。「へえー！ 凄い！ 知らなかった！」 「すけるとん君って頭良いんだね！」 そうさ、間違い無くこう返ってくる。 淡い期待を胸に抱きながら彼女の返答を待つ刹那、僕の鼓動は軽やかに走る馬の足音の様に、彼女に聞こえてしまう程にどんとどんと高鳴っていく。

「え？ なにそれ。 キモイ」

返答はこうだった。 そらそうだ。 相手にとって、全く興味を持っていない人物が例え完璧な知識をひけらかした所で反応はこんなもんだ。

——頭の中が真っ白になった。

彼女に僕の知識は通用しなかったのだ.....。

そこで、僕はダッシュでその場を逃げ切ると自宅に着いてパソコンを立ち上げた。 そう、あくまでも頭の良いところを見せつけてやらねばならぬ！

知らない人は知らないかもしれないが、NECが産み出した名機PC-98というものが世の中には存在した。そしてその名機がなぜか自宅においてあったのだ。

うん、そうだ僕にはパソコンがあるじゃないか！ N88BASICを走らせ“プログラムコード”を書く。

```
10 sugoikokuhaku
```

```
20 cls
```

```
30 print"ai rabu yuu"
```

```
40 input"dou?>"A$
```

```
40 end
```

完璧なプログラムコードだ……これで、頭が良いことを認めて貰えるに違いない！ 今見ても完璧なコードに思える。 しっかりとアポストロフィーが抜けているコメント文を書きinput文で回答まで求めている。 その後に続く文字列はend。 そう、僕は今度こそ完璧に告白が成功すると思っているのだ。

一応デバッグはせんといかん！ F5を高らかに押しプログラムを実行する。 そう、まさに僕は今オーケストラの指揮者。 パソコンという恋の演奏者に告白を唄わせる指揮者なのだ！

—— 一瞬何が起こったかわからなかった。

ピーッ！ 短く鋭い警告音がパソコンのスピーカーから発せられる。

“SyntaxError” 黒い背景に白い文字がやけに輝いて見えた。 何を言っているんだ此奴は？ 僕の告白にエラーはない。 誤っているとすればパソコンの方である。

涙目になりながら必死にエラー原因を探す。 コードは間違っていない。 誰かが僕の恋路を邪魔しようとしているッ！ まさか……恋のライバルが邪魔をしようとしているのか？ いや、落ち着け僕。 パソコンの技術が進んでいるのは何処だ？

アメリカ。 そう、アメリカだ！ ここで以前、父が見ていたターミネーター2を思い出す。

間違い無い……パソコンの反乱である。

いけない、このままでは僕はパソコンに殺されてしまう！！ 皮肉なことに僕の産み出したコードによってパソコンは自我に目覚めてしまった。

なら、パソコンが変形して動き出さない今がチャンス！

僕は、コンセントに刺さっているプラグに飛びつくと思いきり引き抜いてやった。 プツンと音を立てて消えるディスプレイ。 そう、僕はパソコンに勝ったのだ！

無理矢理引き抜いたプラグは先が変な風に折れ曲がり、後で父に説教されるとはこの時夢にも思っていなかった。